

想起された出来事の時間的距離判断ならびに所属判断に 影響を及ぼす要因の検討¹⁾

佐藤 徳

富山大学人間発達科学部

つい最近のことはずなのに遠い昔のことに感じられたり、自分に起こった出来事なのに自分の体験ではないように感じられることがある。本研究は、何がこのような感覚に影響を及ぼしているのかを検討した。その結果、実際には同じ頃の出来事を想起しているにもかかわらず、自尊心が高い者はネガティブな出来事を遠く、自尊心が低い者はポジティブな出来事を遠く感じる事が明らかとなった。また、現在の自己概念と一致しない出来事はより遠く感じられていた。出来事の自己所属感も同様であり、同じく自分に起こった出来事を想起しているにもかかわらず、現在の自己評価と異なる出来事は自分の体験ではないように感じられること、現在の自己概念と一致しない出来事も同様に自分の体験ではないように感じられることが明らかとなった。以上より、想起された出来事の時間的距離判断ならびに所属判断が自己概念や自己評価の影響を受けることが示唆された。

キーワード：自伝的記憶、自己知識、主観的時間的距離、記憶の所属判断、自尊心

問 題

もしある朝目覚めてすべての記憶がなくなっていたとしたら、どうだろうか。哲学者のジョン・R・サールが言うように、仮にグレゴール・ザムザのように、朝起きてみると、自分が大きな虫になっていたとしても、記憶が存在する限りにおいては、(他人を説得できないにしても)かつては違う身体を持っていた人物と自分が同一であることが分かるであろう(Searle, 2005)。しかし、一切の記憶を失ったとしたらどうだろうか。人は過去の出来事を想起することで、自分自身に関する物語(ナラティブ)を形成すると言われている

(Neisser, 1993)。そして、この物語に基づいて、自分は過去から現在までの時間をとおして連続した存在であるという自己の連続性や、過去の自分と現在の自分は同じ人物であるという自己の一貫性の感覚を得るのだという(McAdams, 1996)。記憶を失ったとしても、右手を動かしているのが自分であることは分かるし、自分の歯が痛いことは分かる。過去の自分に関する記憶がなくとも、行為を引き起こしているのは自分だとか、出来事を体験しているのは自分だという、最低限の自己感は維持される(Gallagher, 2000)。しかし、過去の出来事について想起できなければ、自分は誰で、何をしようとしているのかが分からなくなるだろう。

以上のように、自伝的記憶の想起は、自己の連続性感、一貫性感、さらには、アイデンティティの形成に深く関わっていると考えられている(Schacter, 1996; Tulving, 1985)。しかし、人は過去

1) 本論文の作成にあたり、貴重なご意見を賜った、小川奈保、及川昌典、湯川進太郎各先生に記して御礼申し上げます。

の出来事をすべて同じように想起するわけではない。実際には同じ頃の出来事でも、つい昨日のこのように感じられる出来事もあれば、随分と遠い昔のことに感じられる出来事もある。また、自分に起こった出来事のはずなのに、自分の体験ではないように感じられる出来事もある。どのような要因がこうした感覚に影響を及ぼしているのだろうか。Ross & Wilson (2002) は、実験参加者に過去のポジティブな出来事とネガティブな出来事を想起させ、その出来事の現在からの主観的時間的距離（その出来事をどれくらい近い、あるいは遠い過去に起こった出来事と感じるか）を評定させている。その結果、ポジティブな出来事もネガティブな出来事も実際には同時期に経験されていたにもかかわらず、自尊心が高い者は、ポジティブな出来事をより近く、ネガティブな出来事をより遠く感じていることが示されている。彼らは、この結果を、好ましい自己評価を維持しようという自己高揚動機に基づいて、過去の出来事に対する主観的時間的距離が調節される例としている。すなわち、人は失敗体験などのネガティブな出来事を主観的に遠く感じることで、“昔の自分はよく失敗したけれど、今の自分は違う”というように、過去の自分と現在の自分を切り離して現在の自己評価を高めようとするのに対し、成功体験のようなポジティブな出来事を主観的に近く感じることで、過去の成功を現在の自分の一部としてとらえ、現在の自己評価を高めようとするのだという (Wilson & Ross, 2003)。

また、Sheen, Kemp, & Rubin (2001, 2006) は、双生児を対象とした研究で、誰に起こった出来事なのか、その真偽が明らかではない記憶が存在することを示している。たとえば、実際にはどちらか一方が水泳大会で勝ったのだが、双方ともに自分が勝ったと記憶しているなどは、その1例である。双方ともに勝利を収めることはあり得ず、少なくとも、どちらか一方は間違えて記憶していることになる。Sheen et al. (2006) は、以上のような

事例を集め、功績や災難は自分の体験、悪行は自分以外の体験として記憶されていることが多いと指摘している。これらの結果は、自己高揚動機が、ある出来事が誰の体験として記憶されるかにも影響を及ぼしている可能性を示唆する。

しかし、別の可能性も考えられる。Libby & Eibach (2002) は、現在の自己概念と矛盾する体験は、一人称的な視点からではなく、他人を観察するような第三者的な視点で想起される傾向があることを見出している。この結果は、現在の自己概念と矛盾する体験は、まさに他人に起こった出来事のように感じられることを示唆する。出来事がポジティブであるか、ネガティブであるかにかかわらず、現在の自己概念と矛盾する出来事は遠く、また、自分の体験でないように感じられるのかもしれない。

本研究では、まず、研究1において、Ross & Wilson (2002) の追試を行うとともに、出来事の自己所属感（その出来事がどの程度自分に起こった出来事だと感じられるか）についても同様な結果が得られるかを検討する。Ross & Wilson (2002) では、出来事が起こった実際の日付は同じでも、自分に起こったポジティブな出来事はネガティブな出来事より近く感じられると報告している。こうした「バイアス」は自尊心が高い者で強く見られ、他人に起こった出来事では見られなかった。Ross & Wilson (2002) は、自己高揚動機に基づいて主観的時間的距離が調節されるとしているが、本研究でも同様な結果が得られるであろうか。また、出来事の自己所属感も同様に自己高揚動機に基づいて調節されているのであろうか。

他方、James (1890/1950) は、過去の反応を再体験できるかどうかはその過去を自分の一部と感じられるかどうかにとって重要だと指摘している。かつてはあんなに熱狂していたはずのロック・ミュージックを聴いても今では何にも感じる場所がない。熱狂していたはずの昔の自分が遠く、まるで自分ではないかのように感じられる。Libby

& Eibach (2002) は、現在の自分の基準やスキーマが過去とは変わり、想起された行動が現在の基準やスキーマと異なる場合、その昔の自分が自分ではないように感じられると論じている。そこで、研究2では、主観的時間的距離や出来事の自己所属感が現在の自己評価や自己概念と一致するように調節されるかどうかを検討する。

研究 1

目 的

Ross & Wilson (2002) は、実験参加者に過去のポジティブな出来事とネガティブな出来事を想起させ、その出来事の現在からの主観的時間的距離を評定させ、実際には同じ頃の出来事であるにもかかわらず、ポジティブな出来事がネガティブな出来事より近く感じられることを見出している。このバイアスは、自尊心が高い者で顕著であり、他人に起こった出来事では見られなかった。Ross & Wilson (2002) は、以上の結果を、好ましい自己観を維持しようと主観的時間的距離が調節された例と解釈している。研究1では本邦でも Ross & Wilson (2002) と同様な結果が得られるかを検討するとともに、出来事の自己所属感についても同様な結果が得られるかを検討する。

方 法

実験参加者 実験への参加に同意した富山県内の大学生・大学院生 194 名 (男 51 名・女 143 名) を対象とした。参加者の平均年齢 (*SD*) は 23.51 (7.91) 歳であった。

手続き 実験参加者は、行為主体 (自己・親しい他人) × 出来事の感情価 (ポジティブ・ネガティブ) のいずれかの条件にランダムに割り当てられた。自己条件では、実験参加者は、前学期に自分に起こったポジティブな (うれしい, 楽しい, 誇らしいなど) 出来事, または, ネガティブな (辛い, 苦悩した, いらだったなど) 出来事を思い出し, その出来事について簡単に用紙に記入するように求められた。その上で, その出来事の主観的

時間的距離について, 「1. とても遠く感じる」から「10. 昨日のように感じる」までの 10 段階で評定させた。さらに, その出来事がどの程度自分に起こった出来事だと感じられるか (出来事の自己所属感) について, 「1. まったく自分の体験ではないように感じる」から「7. 完全に自分の体験だと感じる」までの 7 段階で評定させた。そして, 最後に, その出来事が実際に起こった日付を月単位 (〇年×月) で記入させた。親しい他人条件においても同様に, 前学期に自分と親しい人に起こったポジティブな出来事, または, ネガティブな出来事について, 簡単に記入させた後, 主観的時間的距離, 自己所属感, 実際の日付について回答させた。また, すべての実験参加者が, Rosenberg の自尊感情尺度 (山本・松井・山成, 1982) に回答した。出来事の想起と自尊感情尺度への回答の実施順序は実験参加者間でランダムとした。

結果と考察

予備的分析の結果, 性別の違いが主観的時間的距離, ならびに, 出来事の自己所属感に及ぼす効果は, 主効果, 交互作用ともになかった (すべて *t* 値は 1.1 以下)。また, 条件によって想起された出来事が起こった実際の日付が異なるということもなかった (すべて *t* 値は 1.2 以下)。

以上を確認した上で, 主観的時間的距離を基準変数とする階層的重回帰分析を実施した。まず, 第1ステップとして, 実際の時間間隔 (想起対象となった出来事が起こってから想起時までに実際に何ヶ月経過したか) を投入し, 次に, 第2ステップとして, 自尊心, 行為主体, 出来事の感情価を同時に投入した。投入の際, 自尊心得点はセンタリングし, 行為主体条件に関しては, 自己条件を 1, 他人条件を 0, 出来事の感情価に関しては, ポジティブ条件を 1, ネガティブ条件を 0 と変換した。さらに, 第3ステップとしてそれらの2次の交互作用を, 第4ステップとしてそれらの3次の交互作用を投入した。各ステップにおける各変数の標準偏回帰係数は Table 1 に示した通り

Table 1 Regressing Subjective Distance From Event and Sense of Ownership Onto Valence Condition, Agent, and Self Esteem

Predictor	Subjective Distance		Ownership	
	β	t	β	t
Step 1				
No. months ago	-.07	0.97	.07	0.96
Step 2				
Valence	.08	1.03	.08	1.27
Agent	.01	0.08	.39	5.85***
Self-esteem	.01	0.13	.03	0.37
Step 3				
Valence×Agent	.08	0.68	-.02	0.20
Valence×Self-esteem	.23	2.20*	.22	2.30*
Agent×Self-esteem	.02	0.18	.01	0.15
Step 4				
Valence×Agent ×Self-esteem	.44	3.25***	.33	2.70**

Note. $df=192$ at Step 1, 189 at Step 2, 186 at Step 3, and 185 at Step 4.

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

である。

自尊心×出来事の感情価の交互作用が有意であったため、自尊心高低別に回帰分析を実施した。その結果、自尊心高群（平均プラス1SD以上）は、ネガティブな出来事よりポジティブな出来事をより近く感じる傾向があった（ $\beta=.23$, $t(190)=2.29$, $p<.05$ ）。それに対し、自尊心低群（平均−1SD以下）は、両者をほぼ同様に感じていた（ $\beta=-.09$, $t(190)=.86$, $n.s.$ ）。しかし、本研究では有意な3次の交互作用が見られている。そこで、3次の交互作用を詳細に検討するため、まず、行為主体別に階層的重回帰分析を行った。その結果、他人に起こった出来事では、実際の時間間隔の主効果（ $\beta=.05$, $t(96)=0.44$, $n.s.$ ）、自尊心の主効果（ $\beta=.01$, $t(94)=0.01$, $n.s.$ ）、出来事の感情価の主効果（ $\beta=.02$, $t(94)=0.23$, $n.s.$ ）、自尊心×出来事の感情価の交互作用（ $\beta=-.08$, $t(93)=0.54$, $n.s.$ ）のいずれも有意ではなかった。それに対し、自分に起こった出来事では、実際の時間間隔の主効果（ $\beta=-.18$, $t(94)=1.82$, $p<.10$ ）、自尊心の主効果

（ $\beta=.01$, $t(92)=0.01$, $n.s.$ ）、出来事の感情価の主効果（ $\beta=.13$, $t(92)=1.23$, $n.s.$ ）は有意ではなかったが、有意な自尊心×出来事の感情価の交互作用が見られた（ $\beta=.55$, $t(91)=4.14$, $p<.001$ ）。自尊心の高低別に分析を行った結果、自尊心高群はネガティブな出来事よりポジティブな出来事をより近く感じていたのに対し（ $\beta=.56$, $t(92)=4.05$, $p<.001$ ）、自尊心低群は逆にネガティブな出来事をより近く感じていた（ $\beta=-.30$, $t(92)=2.20$, $p<.05$ ）。

次に、自尊心の高低によって自分に起こった出来事と他人に起こった出来事に対する反応が異なるかを検討するため、自尊心の高低別に重回帰分析を行った。その結果、自尊心高群では、実際の時間間隔の主効果（ $\beta=-.06$, $t(188)=0.82$, $n.s.$ ）、行為主体の主効果（ $\beta=.02$, $t(186)=0.20$, $n.s.$ ）は有意ではなかったが、出来事の感情価の主効果が有意であり（ $\beta=.24$, $t(186)=2.37$, $p<.05$ ）、自尊心高群はポジティブな出来事をネガティブな出来事より近く感じていた。行為主体×出来事の感情価の交互作用が有意であったため（ $\beta=.48$, $t(185)=2.80$, $p<.01$ ）、感情価毎の分析を行ったところ、自尊心高群は、ポジティブな出来事に関しては他人に起こった出来事よりも自分に起こった出来事の方をより近く感じるが（ $\beta=.31$, $t(93)=2.27$, $p<.05$ ）、逆に、ネガティブな出来事に関しては他人に起こった出来事をより近く感じる傾向があることが示唆された（ $\beta=-.26$, $t(93)=1.80$, $p<.10$ ）。自尊心低群では、実際の時間間隔の主効果（ $\beta=-.05$, $t(188)=0.77$, $n.s.$ ）、行為主体の主効果（ $\beta=-.01$, $t(186)=0.02$, $n.s.$ ）、出来事の感情価の主効果（ $\beta=-.10$, $t(186)=0.95$, $n.s.$ ）いずれも有意ではなく、行為主体×出来事の感情価の交互作用（ $\beta=-.31$, $t(185)=1.82$, $p<.10$ ）のみに有意傾向が見られた。しかし、感情価毎の分析を行ったところ、ポジティブな出来事（ $\beta=-.20$, $t(93)=1.41$, $n.s.$ ）、ネガティブな出来事いずれに関しても行為主体の違いによる差が見られなかった（ $\beta=.17$, $t(93)=1.23$,

n.s.)。

同様に、自己所属感を基準変数とする階層的重回帰分析を実施した。各ステップにおける各変数の標準偏回帰係数は Table 1 に示した通りである。行為主体の主効果が有意であり ($\beta = .39$, $t(189) = 5.85$, $p < .001$)、自分に起こった出来事は他人に起こった出来事よりも有意に自分の体験だと感じられていた。また、自尊心 \times 出来事の感情価の交互作用が有意であり ($\beta = .22$, $t(186) = 2.30$, $p < .05$)、自尊心高群はネガティブな出来事よりポジティブな出来事をより自分の体験と感じていたのに対し ($\beta = .25$, $t(190) = 2.44$, $p < .05$)、自尊心低群ではポジティブな出来事とネガティブな出来事を同じように体験していた ($\beta = -.07$, $t(190) = 0.66$, *n.s.*)。

3次の交互作用が有意なため、まず、行為主体別に回帰分析を行ったところ、他人に起こった出来事については、実際の時間間隔の主効果のみ有意であり ($\beta = .25$, $t(98) = 2.52$, $p < .05$)、他人に起こった出来事も時間の経過とともに自分の体験のように感じられるが、自尊心の主効果 ($\beta = .01$, $t(96) = 0.09$, *n.s.*)、出来事の感情価の主効果 ($\beta = .09$, $t(96) = 0.94$, *n.s.*)、交互作用 ($\beta = .01$, $t(95) = 0.01$, *n.s.*)はいずれも有意ではなかった。他方、自分に起こった出来事については、実際の時間間隔の主効果 ($\beta = -.13$, $t(92) = 1.23$, *n.s.*)、自尊心の主効果 ($\beta = .03$, $t(90) = 0.24$, *n.s.*)、出来事の感情価の主効果 ($\beta = .08$, $t(90) = 0.80$, *n.s.*)はいずれも有意ではなかったが、有意な自尊心 \times 出来事の感情価の交互作用が見られた ($\beta = .56$, $t(89) = 3.99$, $p < .001$)。自尊心高群はネガティブな出来事よりポジティブな出来事をより自分の体験と感じていたのに対し ($\beta = .53$, $t(90) = 3.65$, $p < .001$)、自尊心低群は逆にネガティブな出来事をより自分の体験と感じていた ($\beta = -.34$, $t(90) = 2.42$, $p < .05$)。

次に自尊心の高低別に重回帰分析を行った結果、自尊心高群では、実際の時間間隔の主効果は有意ではなかったが ($\beta = .07$, $t(188) = 0.96$, *n.s.*)、行

為主体の主効果 ($\beta = .40$, $t(186) = 4.22$, $p < .001$)、出来事の感情価の主効果 ($\beta = .25$, $t(186) = 2.69$, $p < .01$)が有意であった。すなわち、自分に起こった出来事は他人に起こった出来事より自分の体験と、ポジティブな出来事はネガティブな出来事より自分の体験と感じられていた。また、行為主体 \times 出来事の感情価の交互作用に有意傾向が見られたため ($\beta = .29$, $t(185) = 1.79$, $p < .10$)、出来事の感情価毎の分析を行ったところ、自尊心高群は、ポジティブな出来事に関しては他人に起こった出来事よりも自分に起こった出来事の方をより自分の体験と感じるが ($\beta = .56$, $t(94) = 4.46$, $p < .001$)、ネガティブな出来事に関しては特にそうした傾向は見られなかった ($\beta = .21$, $t(92) = 1.52$, *n.s.*)。自尊心低群では、実際の時間間隔の主効果 ($\beta = .10$, $t(188) = 1.40$, *n.s.*)と出来事の感情価の主効果 ($\beta = -.08$, $t(186) = 0.86$, *n.s.*)は有意ではなかったが、行為主体の主効果が有意であり ($\beta = .38$, $t(186) = 4.06$, $p < .001$)、自分に起こった出来事は他人に起こった出来事より自分の体験と感じられていた。また、行為主体 \times 出来事の感情価の交互作用が有意だったため ($\beta = -.33$, $t(185) = 2.06$, $p < .05$)、出来事の感情価毎の分析を行ったところ、ネガティブな出来事に関しては他人に起こった出来事よりも自分に起こった出来事の方をより自分の体験と感じるが ($\beta = .54$, $t(92) = 4.11$, $p < .001$)、ポジティブな出来事に関してはそのような傾向が見られなかった ($\beta = .20$, $t(94) = 1.52$, *n.s.*)。

以上、研究1では、Ross & Wilson (2002) の追試を行うとともに、出来事の自己所属感についても同様な結果が得られるかを検討した。まず、主観的時間的距離に関して、本研究においても、自尊心高群は、実際に出来事が起こった日付は同じでも、ネガティブな出来事よりポジティブな出来事の方が近いと感じており、この点において、Ross & Wilson (2002) の結果と一致していた。また、他人に起こった出来事に関しては自分に起

こった出来事においては見られた「バイアス」が見られないという点においても本研究の結果は Ross & Wilson (2002) の結果と一致していた。しかし、重要な点において、本研究の結果と Ross & Wilson (2002) の結果は異なっていた。すなわち、Ross & Wilson (2002) では、一貫して出来事の感情価の主効果が見られており、ポジティブな出来事がネガティブな出来事よりも近く感じられていた。自尊心×出来事の感情価の交互作用こそ見られているが、自尊心高群でよりそのバイアスが顕著だというものであり、決して自尊心低群でネガティブな出来事がポジティブな出来事より近く感じられているわけではない。それに対し、本研究では出来事の感情価の主効果は得られていない。同様な結果は、Ross, Heine, Wilson & Sugimori (2005) でも報告されており、カナダ人はばつの悪い出来事よりも誇らしい出来事の方をより近く感じるのに対し、日本人ではそのような傾向は見られなかった。むしろ、本研究では、自尊心低群では、ネガティブな出来事の方がポジティブな出来事より近く感じられるという、自尊心高群とは逆の結果が見出されており、以上の結果を自己高揚動機によって説明するのは困難である。出来事の自己所属感についても同様である。確かに、自尊心高群では、同じように自分に起こった出来事を想起させているにもかかわらず、ネガティブな出来事よりポジティブな出来事の方がより自分の体験と感じられている。しかし、自尊心低群では、逆に、ネガティブな出来事の方がより自分の体験と感じられており、ここでも自己高揚動機による説明は困難である。

研究1においては、自尊心が高い者は、ポジティブな出来事を近く、ネガティブな出来事を遠く感じ、逆に、自尊心が低い者は、ネガティブな出来事を近く、ポジティブな出来事を遠く感じることを示された。すなわち、現在の自己評価と一致する出来事は近く、現在の自己評価と一致しない出来事は遠く感じられることが示唆された。出

来事の自己所属感に関しても同様であり、現在の自己評価と一致する出来事は自分の体験と感じられるが、現在の自己評価と一致しない出来事は、自分に起こった出来事として想起されているにもかかわらず、自分の体験ではないように感じられることが示されている。以上の結果は、自己高揚動機に基づいて過去の出来事に対する主観的時間的距離や自己所属感が調節されるというよりも、両者が現行の自己評価と一致する方向に調節されることを示唆する。研究2では、現在の自己概念と想起された出来事の一貫性を変数に加え、主観的時間的距離や自己所属感が現行の自己概念や自己評価と一致する方向に調節されているかどうかをさらに検討する。

研究 2

目的

研究1では、自己高揚動機に基づいて、主観的時間的距離ならびに出来事の自己所属感が調節されるとする仮説への支持は得られず、むしろ、両者が現在の自己評価と一致する方向に調節されることを示唆する結果が得られた。研究2では、現在の自己概念と想起される出来事の一貫性を変数に加え、主観的時間的距離や自己所属感が現行の自己概念や自己評価と一致するように調節されるかどうかを検討する。

方法

実験参加者 富山県内の大学生 188 名（男 75 名・女 113 名）を対象とした。平均年齢 (*SD*) は 20.13 (1.54) 歳であった。

手続き 実験参加者は、出来事と現在の自己概念との一貫性（不一致・一致）×出来事の感情価（ポジティブ・ネガティブ）のいずれかの条件にランダムに割り当てられた。不一致条件では、まず、実験参加者は、高校時代の自分のことを思い出し、高校時代の自分と現在の自分とで大きく変わったところはどんなところかを簡単に記入するように求められた。その上で、ポジティブ条件で

は、高校時代と現在とで大きく変わった自分の特徴に関連する、高校時代のポジティブな（うれしい、楽しい、誇らしいなど）出来事を、ネガティブ条件では、高校時代のネガティブな（辛い、苦悩した、いらだったなど）出来事を思い出して用紙に簡単に記入するように求めた。その後、研究1と同様に、その出来事に関して、主観的時間的距離、出来事の自己所属感、実際の日付を回答させた。一致条件では、実験参加者は、高校時代の自分のことを思い出し、高校時代の自分と現在の自分とでほとんど変わらないところはどこかを簡単に記入するように求められた。その上で、ポジティブ条件では、高校時代と現在とでほとんど変わらない自分の特徴に関連する、高校時代のポジティブな出来事を、ネガティブ条件では、高校時代のネガティブな出来事を思い出して用紙に簡単に記入するように求めた。その後、一致条件と同様に、その出来事に関して、主観的時間的距離、出来事の自己所属感、実際の日付を回答させた。また、すべての実験参加者が、Rosenbergの自尊感情尺度（山本・松井・山成，1982）に回答した。出来事の想起と自尊感情尺度への回答の実施順序は実験参加者間でランダムとした。

結果と考察

予備的分析の結果、性別の違いが主観的時間的距離、ならびに、出来事の自己所属感に及ぼす効果は、主効果、交互作用ともになかった（すべて t 値は 1.0 以下）。また、条件によって想起された出来事が起こった実際の日付が異なるということもなかった（すべて t 値は 1.0 以下）。

以上を確認した上で、まず、主観的時間的距離を基準変数とする、階層的重回帰分析を実施した。まず、第1ステップとして、実際の時間間隔を投入し、次に、第2ステップとして、自尊心、出来事と現在の自己概念との一致性、出来事の感情価を同時に投入した。その際、自尊心得点はセンタリングし、一致性に関しては、不一致条件を1、一致条件を0、出来事の感情価に関しては、ポ

ジティブ条件を1、ネガティブ条件を0と変換した。その結果、出来事と現在の自己概念との一致性の有意な主効果が見られ ($\beta = -.19, t(183) = 2.68, p < .01$)、現在の自己概念と異なる出来事は遠く感じられることが示唆された。第3ステップとして、自尊心、自己概念との一致性、出来事の感情価の2次の交互作用を投入し、第4ステップとしてそれらの3次の交互作用を投入した。その結果、自尊心 × 出来事の感情価においてのみ有意な交互作用が見られた ($\beta = .52, t(180) = 5.58, p < .001$)。交互作用の詳細を明らかにするため、自尊心の高低別に回帰分析を行った結果、自尊心高群（平均 +1SD 以上）は、ポジティブな出来事をネガティブな出来事よりも近く感じていたが ($\beta = .31, t(184) = 3.25, p < .01$)、逆に、自尊心低群（平均 -1SD 以下）は、ネガティブな出来事をポジティブな出来事よりも近く感じていた ($\beta = -.43, t(184) = 4.43, p < .001$)。各ステップにおける各変数の標準偏回帰係数は Table 2 に示した通りである。

同様に、自己所属感を基準変数とする階層的重回帰分析を実施した。各ステップにおける各変数

Table 2 Regressing Subjective Distance From Event and Sense of Ownership Onto Valence Condition, Congruency with Self-concept, and Self Esteem

Predictor	Subjective Distance		Ownership	
	β	t	β	t
Step 1				
No. months ago	-.11	1.51	-.04	0.58
Step 2				
Valence	-.06	0.86	-.06	0.75
Congruency	-.19	2.68**	-.18	2.41*
Self-esteem	-.09	1.27	.01	0.04
Step 3				
Valence × Congruency	-.02	0.19	-.03	0.28
Valence × Self-esteem	.52	5.58***	.35	3.60***
Congruency × Self-esteem	-.01	0.08	.06	0.57
Step 4				
Valence × Congruency × Self-esteem	-.11	0.79	.21	1.49

Note. $df = 186$ at Step 1, 183 at Step 2, 180 at Step 3, and 179 at Step 4.

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

の標準偏回帰係数は Table 2 に示した通りである。自己概念との一致性の主効果が有意であり ($\beta = -.18, t(183) = 2.41, p < .05$)、現在の自己概念と異なる出来事は自分の体験でないように感じられていた。また、自尊心 \times 出来事の感情価の交互作用 ($\beta = .35, t(180) = 3.60, p < .001$) が有意であり、自尊心高群はネガティブな出来事よりポジティブな出来事をより自分の体験と感じていたのに対し ($\beta = .20, t(184) = 2.07, p < .05$)、自尊心低群は逆にネガティブな出来事をより自分の体験と感じていた ($\beta = -.31, t(184) = 3.02, p < .01$)。3次の交互作用は有意ではなかった ($\beta = .21, t(179) = 1.49, n.s.$)。

以上、研究 1 と同様、研究 2 においても、主観的時間的距離、出来事の自己所属感の双方において、出来事の感情価の主効果は得られなかった。まず、主観的時間的距離に関しては、実際には同じ頃の出来事が想起されているにもかかわらず、現在の自己概念と異なる出来事は遠く、また、現在の自己評価と異なる出来事は遠く感じられることが示唆された。以上の結果は、自己高揚動機に基づいて主観的時間的距離が調整されるとする Ross & Wilson (2002) の仮説を支持しない。むしろ、現在の自己概念や自己評価と一致するように主観的時間的距離が調整されることを示唆するものであった。出来事の自己所属感も同様であり、実際には自分に起こった出来事を想起しているにもかかわらず、現在の自己概念と異なる出来事は自分の体験ではないように感じられ、現在の自己評価と一致しない出来事は自分の体験でないように感じられていた。Sheen et al. (2006) は、双生児を対象とした研究で、自己高揚動機が出来事が誰の体験として記憶されるかに影響を及ぼしている可能性を示唆しているが、本研究の結果は、Sheen et al. (2006) の結果とは異なり、現在の自己概念や自己評価と一致するように出来事の自己所属感が調節されることを示唆するものであった。

総合的考察

本研究では、主観的時間的距離判断ならびに出来事の自己所属感に影響を及ぼす要因の検討を行った。まず、主観的時間的距離判断に関して、Ross & Wilson (2002) は、本研究と同様な研究を行い、実際には同じ頃の出来事であるにもかかわらず、ポジティブな出来事はネガティブな出来事より近く感じられることを見出している。このバイアスは、特に自尊心が高い者において顕著であり、他人に起こった出来事についてはこうしたバイアスは見られなかった。Ross & Wilson (2002) は、以上の結果を、好ましい自己観を維持しようと主観的時間的距離が調節された例と解釈している。しかし、本研究では一貫して、Ross & Wilson (2002) では見られた出来事の感情価の主効果が見られなかった。同様な結果は、Ross et al. (2005) でも報告されており、そこでは、カナダ人で見られたバイアスが日本人では見られていない。本研究では、むしろ、一貫して、自尊心低群ではネガティブな出来事の方がポジティブな出来事より近く感じられており、以上の結果を自己高揚動機によって説明するのは困難である。

Ross et al. (2005) の研究にも示されているように、自己高揚バイアスは、個人を他者とは明確に区別された存在と捉え、個人の内的属性の実現に価値を置く、相互独立的自己観が優勢な北米では一貫して見られる。それに対して、個々の優れた資質を発現することよりも、自己定義に深く関わる周囲の人間との人間関係を維持することに価値が置かれる、相互協調的自己観が優勢な本邦では、自己高揚バイアスが見られないことが多い (Heine, Lehman, Markus, & Kitayama, 1999)。むしろ、本邦では、自己高揚バイアスが見られなかりでなく、自己のあり方を周囲と調和しようとするために、自己批判的なバイアスさえ見られると指摘されている (Markus & Kitayama, 1991)。本研究においても、Ross et al. (2005) と同様に、自

己高揚バイアスを示す結果は得られなかった。しかし、同時に、自己批判的なバイアスを示す結果も得られなかった。本研究の結果は、一貫して、現在の自己評価ならびに自己概念と一致する出来事は近く、一致しない出来事は遠く感じられるというものであり、既存の理論で説明するなら、むしろ、認知的不協和理論と整合していた。認知的不協和理論に基づけば、現在の自己評価や自己概念と矛盾する出来事を想起した際に生じる認知的不協和を解決するべく、現在の自己評価や自己概念と一致する過去の出来事は近く感じられるが、一致しない出来事は遠く感じられると予測される。本研究の結果は、この予測と一致しており、少なくとも、本邦においては、自己高揚動機による説明よりも、認知的不協和理論による説明の方が妥当であることが示唆される。

出来事の自己所属感も主観的時空間的距離と同様な結果であり、実際には自分に起こった出来事を想起しているにもかかわらず、現在の自己概念と異なる出来事は自分の体験ではないように感じられ、現在の自己評価と一致しない出来事は自分の体験でないように感じられていた。Sheen et al. (2006) は、双生児の記憶を調べ、ポジティブな出来事は自分の体験、ネガティブな出来事は他人の体験として記憶されていることが多いと報告し、自己高揚動機に基づいて出来事の自己所属感が調節される可能性を示唆しているが、本研究の結果はそれを支持せず、むしろ、自己所属感が現在の自己概念や自己評価と一致する方向で調節される可能性を示唆した。従来から、トラウマチックな出来事のように既存の自己スキーマに同化できない体験は「not me」として解離されると報告されているが (e.g., Barclay, 1996; Horowitz, 1986)、本研究の結果からは、まさに現在の自己スキーマと一致しないがゆえに自分の体験ではないように感じられるのだと考えることができる。したがって、自己スキーマがより包括的、統合的なものへと変化すれば、そうした体験も自己の体験として組み

込まれるようになるだろうと予測される。

以上、本研究では、想起された出来事の時空間的距離判断ならびに所属判断に影響を及ぼす要因を調べた。現在の自己についての知識に合うように、自分の過去が再構成されることがあることはよく知られている (e.g., Conway & Playdell-Pearce, 2000; Ross, 1989; Schacter, 2001)。本研究の結果は、自伝的記憶の想起内容のみならず、過去の出来事を想起する際の主観体験もまた、現時点で活性化された自己概念や自己評価の影響を受けることを示唆する。

最後に、本研究の限界について記す。本研究では、記憶の鮮明さ、リハーサル数などの測定を行っていない。本研究は、自伝的記憶そのものではなく、想起された出来事に対する判断を対象としている。しかし、これらの変数の測定を行っていない以上、これらの変数が判断に影響している可能性も否定できない。今後、こうした変数を統制した上で本研究において見出された結果が再現できるかを検討する必要がある。

引用文献

- Barclay, C. R. (1996). Autobiographical remembering: Narrative constraints on objectified selves. In D. C. Rubin (Ed.), *Remembering our past: Studies in autobiographical memory*. New York: Cambridge University Press. pp. 94-125.
- Conway, M., & Playdell-Pearce, C. W. (2000). The construction of autobiographical memories in the self-memory system. *Psychological Review*, **107**, 261-288.
- Gallagher, S. (2000). Philosophical conceptions of the self: Implications for cognitive science. *Trends in Cognitive Science*, **4**, 14-21.
- Heine, S. J., Lehman, D. R., Markus, H. R., & Kitayama, S. (1999). Is there a universal need for positive self-regard? *Psychological Review*, **106**, 766-794.
- Horowitz, M. J. (1986). *Stress response syndromes*. 2nd ed. New York: Jason Aronson.
- James, W. (1890/1950). *The principles of psychology*. Vol. 1. New York: Dover Publications.
- Libby, L. K., & Eibach, R. P. (2002). Looking back in time:

- Self-concept change affects visual perspective in autobiographical memory. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 167–179.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224–253.
- McAdams, D. P. (1996). Personality, modernity, and the storied self: A contemporary framework for studying persons. *Psychological Inquiry*, **7**, 295–321.
- Neisser, U. (1993). The self perceived. In U. Neisser (Ed.), *The perceived self: Ecological and interpersonal sources of self-knowledge*. New York: Cambridge University Press. pp. 3–21.
- Ross, M. (1989). Relation of implicit theories to the construction of personal histories. *Psychological Review*, **96**, 341–357.
- Ross, M., Heine, S. J., Wilson, A. E., & Sugimori, S. (2005). Cross-cultural discrepancies in self-appraisals. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **31**, 1175–1188.
- Ross, M., & Wilson, A. E. (2002). It feels like yesterday: Self-esteem, valence of personal past experiences, and judgments of subjective distance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 792–803.
- Schacter, D. L. (1996). *Searching for memory: The brain, the mind, and the past*. New York: Basic Books.
- Schacter, D. L. (2001). *The seven sins of memory: How the mind forgets and remembers*. Boston: Houghton Mifflin and Company.
- Searle, J. R. (2005). *Mind: A brief introduction*. New York: Oxford University Press.
- Sheen, M., Kemp, S., & Rubin, D. (2001). Twins dispute memory ownership: A new false memory phenomenon. *Memory & Cognition*, **29**, 779–788.
- Sheen, M., Kemp, S., & Rubin, D. C. (2006). Disputes over memory ownership: What memories are disputed? *Genes, Brain and Behavior*, **5**, Suppl 1, 9–13.
- Tulving, E. (1985). Memory and consciousness. *Canadian Psychology*, **26**, 1–12.
- Wilson, A. E., & Ross, M. (2003). The identity function of autobiographical memory: Time is on our side. *Memory*, **11**, 137–149.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64–68.

— 2007.7.11 受稿, 2008.1.9 受理 —

Self Concept and Subjective Temporal Distance and Memory Ownership

Atsushi SATO

Faculty of Human Development, University of Toyama

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2008, Vol. 16, No. 3, 416–425

The purpose of the present study was to investigate the relationship between the person's current views of self and judgments of subjective temporal distance and ownership of experiences in the remembered past. Study 1 showed that an equally temporally distant episode was felt close or remote, depending on the congruency with current self-evaluation. That is, participants with high self-esteem reported that they felt positive events closer in time than equally distant negative events, whereas participants with low self-esteem reported that they felt negative events closer than positive events. Similarly, the “not me” feeling appeared to emerge from a mismatch between current self-evaluation and a remembered event. Study 2 also showed participants reported that they felt remembered episodes that were incongruent with their present self-concept more remote in time and as if “It does not belong to me,” regardless of actual temporal distance and memory ownership. These results suggested that current self concept had bearing on the feelings of subjective temporal distance and the “not me” feeling of the remembered past.

Key words: autobiographical memory, self-knowledge, subjective temporal distance, memory ownership, self-esteem